

Emacs 解剖学

Lecture

7

GNUの誕生まで

井田昌之

今回は ITS Emacs の開発から、GNU General Public License (GPL) の成立に至るまでの間に、Richard Stallman の考え方はどんな経緯をたどったのか、その環境はそれぞれの時代にはどんなものだったのかについて、お話をしてみます。

Richard の実像

多少彼の考え方といったことに踏み込んでみます。したがって、必ずしもここに書いた内容は客観的な事実というわけではなく、何年かの付き合いのなかでの、筆者の体験を通した受取り方という面があることを、はじめにお断りしておきます。

現在の GPL は第2版ですが、FSF (Free Software Foundation) では、GPL の改訂をし、第3版を作ることをプランしています。作られた文書というものは改訂されていくことが自然であるわけですが、同時に、彼自身も少しずつ考え方を変えている、あるいは成長させている、ということにも気を留める必要があります。また、第1版を作ったころとは社会環境、技術レベルが変わってきているという要因も忘れてはいけません。だから、彼が10年前に何を言ったか、何をしたかで、現在の彼を決めつけてしまうのはやめたいと思います。

また、日本に彼が最初に紹介されて以来、彼のキャラクターは「闘う戦士である」というイメージが強調されているように感じています。実際はもっと、繊細でお茶目な、そしてプログラムと自分の理想のことをい

つも考えている「永遠の少年」のような人だと思います。気分がいいと、歩いていても、地下鉄の中でも、コンピュータの前であってもフォークダンスのステップを踏む、そんな姿が彼の本質だという気がしています。

そして、恥じらいながら、「ねえ、こんな話があるんだけど、ぼくはおもしろいと思うんだ。どう？ よかったら遊びにこない？」あるいは「ねえ、中華食べに行くっていう考えもあるんだけど、どう思う？」とか、「もし興味があるんなら、今とっってもおもしろいグループの演奏してるカセットをもっているんだけど、聞いてみない？ よかったら1週間貸すよ」などという言い方をする彼の姿を思い出します。

あるいは、インド料理の店で、全然、関係のない隣にすわって食べているカップルに対して、ごく、率直・素朴な気持ちから「その料理はどう？ どんな味？ そっちよりぼくの頼んだほうがおいしいと思うけれど、比べてみない？」などと言うのも彼の本質だと思っています。もっともこの率直・素朴型のスタイルでは、よくトラブルを起こすのですが…

彼がすごした環境、あるいは彼が今も守ろうとしている文化というのは何なのか？

それは GNU、あるいは GNU Emacs に具体的に現われています。そこで、彼の軌跡とその時代をたどってみたいしょう。

MIT の AI 研

Richard Stallman は、おおざっぱに言って、ニューヨークの高校生からハーバード大学の物理の学生、そして MIT AI 研のプログラマーという履歴をもちます。

AI 研、そしてそこにある ITS システムが彼の最初の居心地がよいと感じた環境でした。そこには、それぞれ独立した芸術家がたくさんいて、それぞれの技を完成させるうえで、互いに利用し合い、育て合う、というような暮らしがありました。良き意味でのハッカー文化がそこにあったと言えます（当然、彼らハッカーは、現在のマスコミが定着させようとしているような侵入者・破壊者のようなものではありません。むしろ人間の作ったシステムというものは欠陥だらけだということを熟知した、繊細な芸術家であります）。彼らは、「美」ということをいつも気にしていたように思います。

「美しいか、そうでないか」あるいは、「さえてるか、さえてないか」で判断をする傾向があったようです。

最初の環境：ITS

彼にとって最初の「すみか」である ITS とは、何だったのでしょうか？

ITS の名は Incompatible Time Sharing System の頭文字からきています。今も AI 研にいる Tom Knight がつけた名前ようです。ITS は当時の PDP-6 の OS でした。Richard はこの ITS の上で Emacs を作っていきます。

なぜ Incompatible Time Sharing System という名前がついたのでしょうか？ それは、当時、IBM マシンの上に作られた CTSS (Compatible Time Sharing System) に対する「あてこすり」でした。「コンパティブルタイムシェアリングシステムより、我々のインコンパティブルタイムシェアリングシステムのほうがコンパティブルだ」という主張です。CTSS は MULTICS に発展し、ITS はその後、Digital Equipment 社のコンピュータに大きな影響を与えます。彼らにとって、CTSS は最悪のかっこう悪いシステム



Legal Seafood にて (Stallman 氏と筆者)

で、それとはまったく異なった設計原理に基づくコンピュータシステムとして ITS を始めるのです。

ITS は、開放的なシステムで、ハッカーにとって居心地のよいシステムでした。絶えず少しずつユーザーによって手が入られ、直していけるのです。向上の可能性がいつもあって、改良していけるというのはすばらしいことです。

この ITS も Tennex やその後の OS との競争の中で敗れていきます。それはちょうど、工業製品としてのコンピュータシステムの進歩ということ、つまり、多数のさまざまな人が利用する、さらに言い換えれば、道具としてときどきコンピュータを使う人たちが増えてくることの中で、自分の個人的な趣味・理想を実現する生活の場としてコンピュータシステムを考える人たちの理想に燃えた共同社会のアイデアとのギャップが出てきたということです。

原始的理想主義的共同社会

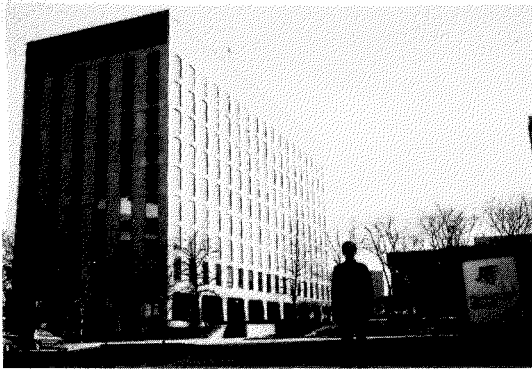
ITS と CTSS の決定的な違いは、CTSS にはあったけれど、ITS ではパスワードがそもそもなかったことです。

ITS では、ファイルのアクセスも相互に簡単にできました。そして、これは、

「自分でもプログラムを作るが、人のプログラムも利用し、全体として使いやすいシステムにみんな育てていく」

という文化に合ったものでした。いわば、原始的な共同社会を志向していたと言えることができるでしょう。

70年代に入り、いろいろな技術要素がコンピュー



テックスクエアビルディング

タシステムに入ってきますが、その中で彼がまず最も気にしたのは、この「パスワード」の問題だったようです。

彼は実質的にパスワードを機能させないように呼びかけ、自分もそうします。まずリターンキーだけのパスワードにしようと呼びかけ、それに成功します。次にそれがまずいようになると、その内容を具体的にここで述べるわけにはいきませんが、模範を示すつもりで、彼は、自分のパスワードを単純な誰でもわかるようなものにします。

セキュリティと官僚主義は、彼にとって同じものだったのです。そしてそれは攻撃の対象でした。

今でも思い出しますが、初期のインターネットはみなオープンでした。アメリカの中ではどこへ行っても「使いたいだけけれど」と言うので貸してくれて、自分の東京のホームにアクセスしたりできたのです。便利も便利、大感激でした。電話でのアクセスも、それぞれの大学や研究機関のターミナルサーバに入ってそこから直接に aoyama.ac.jp に入ることができました。87、88、89年ころのことです。それがだんだんできなくなってきて、ごく限られた知合い・友人のところだけになりました。私もだんだんと住みにくくなつたなあと考えたものです。

パスワードの話に戻しますが、最初に彼に東京で私のところのシステムを東京での作業場所として提供した91年には、まだ、パスワードをなくそうと言っていました。けれども翌年は彼はもう言わなくなりました。

時代の嵐

68年あるいは69年といった時代は、反戦の嵐が吹き荒れた年でもあります。そして、コンピュータというのは、特にアメリカのありふれた若者たちの間では「体制の手先」のようなイメージがあったんだと、ちょうど同じ世代を過ごした Guy Steele が語ってくれました。普通の人にとっては、IBM マシンの CTSS もハッカー文化の ITS も、どちらも何も変わりのないテクノロジー至上主義と見えたようです。AI 研のあったテックスクエアにも抗議のデモがきました。

テックスクエアの9階には今でも鍵がかかっています。ハッカーたちにとっては鍵というのは秘密主義の象徴で、そんなものはなくせというのが主張でした。パスワードも同じことです。しかし、皮肉なことに外からの抗議デモに対抗するのに彼らはバリケードと鍵に頼りました。

それ以後、「錠のあるところでは働かない」といったハッカーも錠を一部認めるようになるのです（ただし、このことが Richard のパスワードに関して起こるのは、筆者の知る限りでは92年ころだと思います。それはインターネットの普及の中でネットワーククラッカーの横行から身を守るためでした）。

Emacs Commune

「競争するより一緒にやろう (Work with each other rather than against.)」このシンプルな彼の言葉に彼の考え方のすべてがあるような気がします。「アメリカは利己的な競争社会になっている。それを建設的な共同社会に変えたい。」これも当時の彼の言葉です。思想的な深さというよりも理想主義的な素朴さをもった表現だと私は思います。

彼は、Emacs をこの原理を具体的に実践する場として選びました。事実 Emacs はそれにふさわしい設計と役割をもっていました。そして、その結果、Emacs は世界中のどこでも使っている標準的なテキストエディタに育っていきます。

「Emacs の改良・機能向上に役立てるには、拡張した部分はすべて私のところへ送ること。私が配っているようにしてほしい、そしてみんなで分かち合おう。」

これを彼は Emacs Commune と呼びました。

生活の変化

技術の進歩と普及は状況をどんどん変えていきます。同時に、ハッキングのことばかり考えていた連中も、結婚し子供ができ、生活が変わってきます。また、組織やグループの中での責任を背負うようになってきます。ビジネスをし出すのです。

「独身状態」のものは、今までどおりの生活を続けることができるけれども、次第にそういう仲間が減ってきます。

入って来るのは、新しい若い人たちばかりになりません。そうすると、たとえば水鉄砲を片手に廊下をキャッキャとかけめぐる若者が、FSF のプログラマになってきます。Richard と一緒に気楽に「中華料理食へに行こうか？」という連中がテックスクエアからだんだんと消えていきます。だんだん、Richard にとって寂しい時代になってきます。筆者が9月に行ったときには、彼のお母さんが作った生魚の酢漬けとでもいうべきおかずを、(結構日本人の舌にあう味で、おいしい

いので) 一緒につまんでいましたが、まわりの人たちは変なものを食べていると逃げ出してしまうのです。

そして、若い人たちの間では昔の人たちとは違って、すべてを共有するという方式を扱いかねているのが出てきます。潜水艦の乗組員でもプライバシー守られる空間をそれぞれに、と要求するという時代です。そして自分のホームを他人が書けるようにしておくともメチャメチャに壊されてしまうのではないかという懸念が、共通にしておく便利さより勝つような時代になります。

しばらくは彼のディレクトリは 777 でしたが、彼自身も 740 とか 755 に設定するようになってきます。

事実、パソコン世代の人たちには、UNIX などのファイルシステムの中で、自分のディレクトリの中のアクセス権をどう考えるかで設定しておけばよいのか知らない人たちが多くなっていると思います。

管理者の苦渋

また、こんなことがありました。パトリック・ウィンストンは言います。「AI Lab は現在では多数の比較

SEG出版のコンピュータソフト

SEG DERIVE SET/日本語マニュアル版

内容 ■ DERIVE3+DERIVE演習ノート

対応 ■ NEC PC 98/98互換機 ■ IBMPC(DOS/V) ●定価各22,000円

1枚のフロッピーと640Kメモリー機、MS-DOSシステムだけで作動するとてもシンプルでコンパクトな数式処理ソフトの世界的ベストセラー、DERIVE(デライブ)マニュアルの完璧な日本語版が完成しました。

発売当初から使用者にやさしいソフトとして定評がありましたが、数学とコンピュータに精通した訳者による、吟味された翻訳文マニュアルでさらに使いやすいソフトになりました。

中学生から研究者まで、数学に関心のある総ての方にお使いいただける、どんなパソコン用のOSにも対応するMS-DOS上ソフトの軽快感をご体験下さい。

■DERIVEのメモリー部分を拡張したDERIVE XM SETもあります。対応 ■ IBMPC(DOS/V) ●定価42,000円

SEG出版の本

SEGコレクション 新刊//

数学ア・ラ・カルト

光田 義著 四六判上製本 240頁 定価1,480円

高校・大学初年度に履修する数学の範囲から、基本的項目及び概念を選び、それぞれにワンポイント的に解説を加えた。知りたい、調べてみたいと思った内容を手軽に引くことができるユニークな数学ミニ辞書である。

実数論講義

赤 摂也著 A5判上製本 316頁 定価2,800円 好評発売中//

SEGコンピュータシリーズ

DERIVEで学ぶやさしい数式処理入門

白田昭司・伊藤敏・井上祥史著
B5判変形軽装本 210頁
定価2,600円

SEG出版

〒160 東京都新宿区西新宿7-13-12 時屋ビル

TEL.03(3366)3677 FAX.03(3367)1460

(定価税込)

的少額の資金の導入によって成り立っているが、以前は ARPA などのお金でほとんどまかなえた。昔は楽だったよ。」そして AI 研のハッカーたちの生命線は、それに依存していました。

鋭い感受性をもったある意味で理想主義者の集まりであった彼らは、互いに尊敬し合っていたし、自分たちが、エリート、特別な存在であることを心得ていたと思います。同時に実態としては極めて現実的に世の中に対応していった側面もあるのです。

結局このハッカーたちがやってきたことは、いきさつや、余計な理屈づけを全部とってしまえんとすれば何だったんだらうか？ そんなことを最近考えることがあります。筆者の結論は、

「道具を作るためのよい道具を作ること」

こんなことだったんじゃないかと思っています。

もっとも、そこに問題点の始まりがあったということもできます。そのうち、その道具を改良するということが目的になってきていつでも道具いじりばかりしているという、研究者の本務という問題点が起るのです。所長がパトリック・ウィンストンになり、彼の方針でのハッカー追放は、こここのところからきています。

彼の管理者としての苦渋を語ってくれたときの顔は今でも覚えています。彼は以下の3点を問題にしました。

1. ハッカーはドキュメントを残さない。
→したがって、他の人がそれを受け継いで仕事を進められない。
2. ハッカーは自分の芸術作品としてプログラムを作っている。
→論文を書かないので研究所としてはたいへん困る。
→いい趣味の部分はいいが、そうでない部分もある。しかし、他の人が手を入れられない。
3. ハッカーはスケジュール管理をしない。
→したがって、プロジェクトの一員としてみなすのは骨だ。

「ハッカーの連中は、システムいじり以外のことには興味をもたなくなってしまうんだ。」とパトリックは言います。

OS lock から逃れるたくましさ

GNU Emacs の前身となっている Emacs は、ITS システム上の Emacs でした。しかし、ITS が使われなくなっても Emacs は生き延びていきます。彼は、たくましく、力強く、Emacs を中心におく彼の理想が、今日、OS lock といわれる現象（アプリケーションプログラムが、ベースにする OS の寿命と運命を共にしてしまうこと）に陥らないように、ITS の寿命から切り放そうとします。それで彼は、時代の流れを感じとりながら、Lisp マシン、次に UNIX に、Emacs のベースをシフトさせていきます。

そして、Emacs の製作者が Richard Stallman であることに疑いの余地はないですが、同時に、多数の人の知恵と具体的なソースコードが組み込まれていることも事実です。純粋に彼が一人で誰の手も借りずにすべてを書き上げたのではないわけです。ユーザの声や貢献を取り入れながら、Emacs を成長させていったのです。

言い換えれば、Emacs は機能拡張が容易にできるように設計されています。これは、Teco 以来の性質を受け継いできたものです。

この性質を利用して、Emacs の上で蓄積を貯め、それを OS からはできるだけ独立させようとしています。

LISP マシンへの逃避

だんだん大きなタイムシェアリング方式のコンピュータがハッカーの理想に合わなくなってくると、それを実現できそうな別の環境へと興味が移ってくるというのは、誰が考えてもありそうなことです。それは、そのころ Greenblatt らが設計を開始していた、AI 用のシングルユーザシステム、Lisp マシンでした。Lisp 言語が彼の理想に合う道具だということもありました。

30 万ドルほどの資金を ARPA から得て、AI 研では 6 台の Cons マシンを作ります。Lisp マシンでは Lisp プログラムの実行環境とその開発環境が連続していて、Emacs がその中心となる位置にいました。さらに数十台が作られ、その結果ビジネスにしよう、



講演する Stallman 氏

Lisp マシンを売ろう、という動きが当然出てきます。

Greenblatt は、大学の研究所である AI 研のスタイルのままやっつけられるような会社を作ろうとしました。知らないものはその中に入れないうし、外部からの投資も受けない、自分たちでできる範囲で自由にする、という感じです。

多くの周辺の人たちは、それではうまくいかなくなるだろうくらいのことは理解していました。お金儲けを専門とする人たちが入って、それでやっていかなければ会社としては成り立たないだろうということは理解はしていたのです。

Richard は、そもそもこれらの動きそのものに疑問を感じていました。

「どっちにしても結局同じことさ。」

彼らはなんとか一つのグループとしてやっていこうとしましたが、うまくいきませんでした。80年代初めのこの辺のことは、Steven Levy の *Hackers* という本 (Dell Book, 1985) に詳しく書かれています。

Greenblatt は会社を起こそうとします。しかし、AI 研では彼の Lisp Machine Inc. (LMI) についていこうという人は少なかったのです。彼はプロの経営者を入れるという考え方には賛成しませんでした。当時としては高性能の端末を作り、Lisp マシンキーボードのもとを作り、今も AI 研にいる Tom Knight はこのとき、LMI には懐疑的で、Greenblatt とは対立していました。そっちにつくのは疑問だが、ビジネス化には興味をもつという人たちは、当時 AI 研の所長をやめて実業を始めていた Noftsker を中心とする動きに従うものが増えました。

Greenblatt は AI 研と約束した期限になり、彼のそ

もその考え方に沿った会社の設立を決めます。それを受けて、Noftsker は外部資本の投資を受けた Symbolics 社を始めます。AI 研の中で、まわりで、この2社が競うようになります。

そのうち、明らかに LMI 社のほうが行き詰まり出します。それで LMI 社は Texas Instruments 社からの資本導入などを決め、なんとか動き出します。LMI 社のほうがハードウェア技術に強く、Symbolics 社はソフトウェアに強いという力関係になってきます。Symbolics 社は、多数の研究員を AI 研から雇い入れると同時に、ソフトウェアノウハウが LMI 社に流れるのを防ぐために、LMI 社員が AI 研で兼職するのを問題にし、出て行かせてしまいます。80年代前半のことです。

そしてソフトウェアの問題なので、Richard としては Symbolics 社とぶつかるようになります。彼にとっての悪人は Symbolics 社でした。

そして、今までの文化を知っている人たちはいなくなり、まったく新しいタイプの文化が AI 研にもちこまれて来ます。彼の目には、それはとても耐えられないものでした。彼は、「Oh! my poor AI Lab! You are dying and I can't save you.」(「かわいそうな AI 研! 死にかけているお前を私は救えないよ。」Essay より) と嘆きます。

Richard Stallman は「Symbolics 社は使わないし、そこで働く奴とも話をしない。そこと関係をもつ奴とも話をしたくない。」と決めます。

Richard は LMI 社に協力的になります。そして、Symbolics 社で優秀なソフトウェア開発者たちが作成するコードを reverse engineering して、コピーはしないで、機能的に等しいプログラムを作って、LMI 社に提供し出します。

そう、数年前に通産省のある人たちと Richard を会わせたときに、彼は目をかがやかせて、「暗号技術をアメリカが提供することを拒むなら、その技術をよく知って、それと同等あるいはそれ以上のものを日本で作ってそれを対抗馬としてはやらせればいい。」と言っていたのを思い出します。

Richard はしきりに「AI 研は死んだ」ということだけを言っていました。93年に住んでみるまで、それがどんな意味があるのか本質がわかりませんでした。この2社の確執の中で、AI 研のハッカー文化は

GNU's Bulletin

January, 1996

The GNU's Bulletin is the semi-annual newsletter of the Free Software Foundation, bringing you news about the GNU Project.

Free Software Foundation, Inc.
59 Temple Place, Suite 330
Boston, MA 02111-1307 USA

Telephone: +1 617 542-2642
Fax (including Japan): +1-617-542-2652
Electronic mail: gnu@prep.ai.mit.edu



Table of Contents

GNU's Who	2
Administrivia and Copyright	2
Other GPL'ed Software	2
What is the FSF?	3
What is Copyleft?	3
What is the Hurd?	4
Conditions for Using Bison	4
Freely Available Texts	4
First Free Software Conference	5
GNU's Flashes	5
Help from Free Software Companies	8
Free Software Redistributors Donate	8
Free Software Support	9
Zimmermann Legal Defense Fund	9
Appeal	10
What is the LPP?	10
News from the LPP	11
GNU & Other Free Software in Japan	11
Help the GNU Translation Project	13
Forthcoming GNU's	13
GNU Software	15
Program/Package Cross Reference	33
Tapes	36
Languages Tape	37
Lisp/Lonex Tape	37
Utilities Tape	37
Scheme Tape	38
X11 Tapes	38
Berkeley 4.4BSD Lite Tape	38
VMS Emacs and VMS Compiler	38
Tapes	38
CD-ROMs	39
Pricing of the GNU CD-ROMs	39
December 1995 Compiler Tools	40
Binaris CD-ROM	40
MS-DOS Book with CD-ROM	40
Dobson GNU/Linux Book with	40
CD-ROM	40
Source Code CD-ROMs	41
December 1995 Source Code	41
CD-ROMs	41
June 1995 Source Code CD-ROM	42
November 1993 Source Code	42
CD-ROM	42
MS-DOS Diskettes	43
DGPP Diskettes	43
Emacs Diskettes	43
Selected Utilities Diskettes	43
Windows Diskette	44
Tape & CD-ROM Subscription	44
Services	44
The Deluxe Distribution	44
GNU Documentation	45
How to Get GNU Software	46
PSF T-shirt	47
Free Software for Microcomputers	48
Project GNU Wish List	49
Thank GNU!	50
Donations Translated Into Free	51
Software	51
Cygnum Matches Donations!	51
Free Software Foundation Order Form	51
Center	51

GNU's Bulletin (96年1月号)の表紙

(日本語版は引地夫妻の編集で「GNU ダイジェスト」という名前で出されている)

ずたずたにされたというわけですが、彼の嘆きの正しさと、それに加えて、彼の嘆きは一面だけをとらえているにすぎないということ、多くの人が彼を偉いと思うが必ずしも同調する人ばかりでないこと、そういったことの理由がかなりわかったような気がします。それを直接言葉で説明するのは大変なことで、今回の文章全体から感じてもらえればと思います。

GNUの誕生: GNU is Not UNIX

Richard が、かって泣かんばかりに嘆いたことがあります。

「私の人生ってなんだったんだろう。」

筆者が感じるのは、技術の進歩はそれだけで独立しているものではないということです。それなのに彼は、あまりに自分の仕事に熱中してしまわりのことを気にしていませんでした。それにとどき自分で気がついて、嘆くことがあるのです。同時に私生活についても同じことが言えます。あるとき、いつものよう

な満員の小田急線の中で、そばにいた若いアメリカ人女性3人に、一生懸命彼が話しかけていたことがあります。明らかに話がかみ合わないのですが、それでもめげずに必死に話しかけます。3人は先に降ります。すると、彼は「チェッ、また逃しちゃった。いつものなんだ。」

同時に彼は、彼のビジネスにはたくましさをもっていました。そして成功していました。GNU ソフトは、基本的には UNIX 用のツールだと思っている人が多いですが、そうではありません。GNU は GNU なのです。Emacs がいろいろなシステムの上で動作するように、GNU は UNIX と軌を一にするものではありません。

ITS そして Lisp マシンの次に、彼はあたためていた理想を実現するプラットフォームとして、UNIX に目をつけます。UNIX はちょうど TCP/IP そしてインターネットの普及とともに、彼の理想を実現する場として格好のものとなります。

UNIX の上に彼の理想を実現して、それを世界中の人たちに利用してもらい、またフィードバックを受けよう。けれども UNIX そのものじゃない。それで、GNU is Not UNIX にしよう!

GNU General Public License Version 2 より

そこでいよいよ GNU の話になります。最初に述べたように、いわゆる GPL (GNU General Public License) は、現在第2版です。第1版は90年ころに大きく紹介されました。そして、今 FSF ではその改訂をし、第3版の作成にかかっています。

第1版の紹介に際しては、「すべてのソフトウェアはフリーでなければならない」ということの過激な側面が実態以上に強調されて受け取られたように思います。

たとえば、第1版の日本語版は以下のような文で始まるのです。

「ソフトウェア会社の使用許諾契約書は、多くの場合、その企業の意のままにユーザを縛ろうとしています。それに対して我々の一般公有使用許諾は、…」

ある種の、対立的というか古い時代の階級闘争的な概念を感じる人も出てくるでしょう。「意のままにユ

一ザを縛ろうとしている」あるいは「我々の一般公有使用許諾は」といった表現は気になります。この部分の第2版の井田私訳は次のようになります。

「多くのソフトウェアライセンスは、そのソフトウェアを共有したり変更したりする利用者の自由度を排除するように意図されています。一方、GNU GPL は、…」

上の二つを比べてみてください。

第2版では、基本的な性質は変わっていないものの、現実的なビジネス環境を理解した細かな取り決めが規定されています。さらに GNU Library General Public License が別に用意されていてライブラリ機能の組込みに関する規定があったりします。

これは、第1版の規定文書だけでは不明確な点が多く、憶測により、「ソフトウェアは無料でなければならない」とか、「GNU で提供されるソフトを使って作成したソフトは販売できない」といったニュアンスの誤解を生んでいたもので、徐々に本当に言いたいことをまとめていった、あるいは彼自身世の中の流れを感じて変わっていったことを反映していると言えます。

そう、彼は世の中の動きには結構敏感です。そしてそれを可能な限りとらえようとしています。自分のロジックをそこに持ち込んでみようとしています。それでよく問題を起こすのですが、彼のほうがずっと引き下がるケースもあつたりします。少なくともチャレンジ精神はまったく衰えていないのは感心します。そして、「君子豹変す」ということわざを、彼に見ることもあります。UNIX があまりおもわしくなさそうだという話が出たときに、彼のほうから、「じゃあ、誰かマイクロソフトに連絡してくれないか、今後 NT をベースにするのはどう？ NT の上でかなり GNU ソフトは載っているんだ。」などと真顔でいう一面もっています。文字どおり“GNU is Not UNIX”なのです。

GPL は、(よくあるライセンスは自由度をとりあげるためのものだが、それと違って)フリーソフトウェアを共有し変更する自由を保証するためのライセンスです。そして、「みんなで自分のフリーソフトを GPL で供給しよう。」と呼びかけるのです。フリーというのは自由ということであって、無料という意味ではありません(正確な GPL の解釈については正しく全文を読んでください)。

最後に、ちょっと GPL についてフォローをしておきます。GPL に従うソフトウェアは、「1) 自由に再配布してよいし、2) もし必要と感じたらそのソースを入手できるし、3) そのソフトを改変したり、一部を利用したりして、そこから自分のフリーソフトを作つてよい」と定められています。

「you receive source code or can get it if you want it」が原文です。「バイナリを渡すと同時に、ソースコードも渡さなければならない」とは書いてありません。あくまで利用者の請求権の形になっています。この辺を拡大解釈しているケースも見られたように思えます。GPL の第3版では、この辺の合理的な解決を試みます。まだ答が出ていないので、それについてはいづれお話ししましょう。

(いだ まさゆき 青山学院大学 国際政治経済学部)
[ida@sipeb.aoyama.ac.jp]

お知らせ

第21回 法とコンピュータ学会総会・研究会

日時：1996年11月22日(金) 9:30-17:00

場所：学習院大学・百周年記念会館
(東京都豊島区目白1-5-1)

参加費：会員：無料 一般：4,000円(資料代含む)

「法とコンピュータ」No. 14(95年度版2,500円)の残部があります。ご希望の方は事務局まで。

問合せ先：〒107 東京都港区南青山2-11-17 第一法規ビル内 法とコンピュータ学会事務局

Tel. 03-3796-5422

Fax. 03-3479-3343(担当：鈴木、早田)

REGISTRATION
INFORMATION